

頻度副詞に関する一考察
—— 低頻度を表す副詞をめぐって ——

江 雯 薰

(台湾・淡江大学)

A Study on Frequency Adverbs: Focusing on Low-Frequency Adverbs

CHIANG Wen-Shun

Tamkang University of Taiwan

Abstract

This article focuses on the low-frequency adverbs “Tamani,” “Tokitama,” “Tokidoki,” and “Mareni.” I investigate their structure by observing their temporal restrictions, predicate word form, subjects, if the adverb can be used with a negative sentence, if it can express something that has already happened, and if it can be used declaratively.

The results show that these adverbs appear mostly in the perfective form, and, because of the frequencies they express, there is a weak oppositional aspect between the “ru” and “teiru” forms. “Mareni” is not used to describe general subjects in a general state nor is it used to describe individual subjects in a temporary state. However, “Mareni” can be used to express something that has already happened. “Tamani,” “Tokitama,” or “Tokidoki” can be used to recount factual information. “Mareni” is different because: it is used to describe something that has already happened ; it is not regularly used in the first- or second-person ; it is more declarative ; and it has a fixed usage of “Mareni miru + noun.”

In conclusion, there are at least two types of low-frequency adverbs: adverbs that only express the frequency of occurrence, such as “Tamani,” “Tokitama,” and “Tokidoki ;” and adverbs that are declarative, such as “Mareni.”

1. はじめに

頻度性の高さという観点からみると、頻度を表す副詞には、「たえず」「しじゅう」「しょっちゅう」「よく」等のように高頻度を表すもの、「しばしば」「たびたび」「ちよくちよく」「ちょいちょい」等のように中頻度を表すもの、「たまに」「ときたま」「ときどき」「まれに」等のように低頻度

を表すものがある。頻度を表す副詞を体系化するため、本稿では低頻度の副詞、「たまに」「ときたま」「ときどき」「まれに」（以下で4語と称する）を中心に考察して、それ以外の副詞は今後の課題とする。

「たまに」「ときたま」「ときどき」「まれに」は、辞書類においては、たとえば『日本国語大辞典（第二版）』（2002）では、

たま【偶・適】（名詞・形動）めったにないこと。まれであること。また、そのさま。

ときたま【時偶】（副詞）ときおり、たまに。

ときどき【時時】（名詞）（古くは「ときとき」とも）その時その時。その季節その季節。その
おりおり。

（副詞）①時に応じて。おりにふれて。おりおり。

②（「に」を伴うこともある）たまには。ときおり。じじ。

まれ【稀・希・罕】（形動）①全くないというわけではなく、ごく少し存在するさま。数少なく
珍しいさま。稀少。

②機会や場合が、ごく少ないさま。たまさか。

のように、【偶・適】【時偶】【時時】【稀・希・罕】の語義が記述してある。語義からみると、4語はともに回数が少ないことを表す副詞であると言える。また、品詞からみると、「たま」は名詞や形容動詞として用いられるが、「に」がついて、「たまに」の形で副詞として用いられている。「ときたま」「ときどき」も副詞として用いられているが、「ときどき」は名詞としても用いることができる。「まれ」は形容動詞であるが、「に」がついて「まれに」の形で副詞として用いられている。

4語は、次の(1)のように、互いに置き換えられる場合もあるが、(2)のように、置き換えにくい場合もある。

(1) 友人の披露宴に電報を打たないはずはなく、しかし翌日、返信が届いたというのはどうも出来すぎている。ただ、たまににまれに／ときたま／ときどきこういうことは起り得る。（私の犬）

(1) は、「友人の披露宴にお祝い電報を打つのは常識であるが、翌日返信が届いたというのは作り話のようだ。でもごく少ないがこういうこともありうる。」という意味を表す。このような場合は、互いに置き換えられる。それに対して、

(2) 若い二人が笹だの洗面器だのすりこぎだのすり鉢だの話をして歩いている。だがそれが三三子にはけっこう楽しかった。それがきっかけで、三三子はときどきにたまに／ときたま／*まれにに公一と会うことになった。（肝）

(2) は、「三三子は公一と話が合っているので、時折公一と会うことになった」という意味を表す。この例では、「まれに」に置き換えにくいと思われる。この例を頻度性からみると、「ときどき」は、「たまに」より回数が多く、「ときたま」は「まれに」に近いと思われる。「ときどき」を「まれに」に置き換えにくいのは、かなりの頻度差があるためであると思われる。また、

(3) 彼はたまに／ときたま／ときどき／まれににゴルフをすることがある。（作例）

(3) のような文においては、4語のいずれでも用いることができる。だが、係り先の観点から見る

と、「たまに」「ときたま」「ときどき」は「ゴルフをする」まで、「まれに」は「ゴルフをすることがある」まで係ると思われる。

このようにみると、4語は同じく低頻度を表す副詞であるが、相違性は多少あると言える。その相違性について、(2)のようにそれぞれの表す頻度差からの違いもあるが、(3)のように構文的な差異もあると考えられる。本稿では構文的な特徴を中心に考察する。

2. 先行研究

頻度副詞について、その全体を述べるものには、矢澤(2000)や仁田(2002)があるが、個々の語義についての研究には、森田(1989)や飛田・浅田(1994)や八尾(2009)がある。

まず、頻度副詞全体の研究について、矢澤(2000)は、「頻度の修飾成分は、ある事態が時間軸上においてどのくらい存在するかという、事態の存在のあり方を表す。」とし、また「頻度の修飾成分は、動きだけでなく、コトの存在も修飾単位としえるのである。」ともしている。

仁田(2002)は、低頻度を表す副詞について、「時タマ」「タマニ(ハ)」「マレニ」「メッタニ」を挙げ、「いずれも、事態の繰り返し・反復の頻度性が低いことを表している。」としている。また、これらの副詞は「取り立て助辞の「シカ」が後接しうる」ことで、高頻度を表す副詞と中頻度を表す副詞とに大別されている、ということも指摘している。

次は、個々の語義についての研究である。

まず、森田(1989)をみる。

「たまに」について、「事の生起がある時を置いて繰り返されはするが、その間隔がかなり開いている(と感じる)状態。以前に例がなかったとか、今後絶対に起こる可能性のない事柄とかには「たま」は使えない。「たまに／たまの」と言う以上、過去か未来における繰り返しを意識している。」とし、「「たまに／たまの」は、意識的に起こす場合も偶然に起こる場合にも使える。」ともしている。

「ときたま」については、「物事の間隔がかなり開いて起こるさま」と説明している。

「たびたび」「しばしば」との比較で「ときどき」を取り上げている。そして、「事柄の生起の間隔と回数を問題としている。何回も起こる(または、何回も行う)事柄で、「たびたび／しばしば」に比べて「ときどき」は頻度が低い。“しょっちゅう”ではなく、ある期間に何度か数える程度の回数である。」という特徴があると指摘している。

「まれに」について、「「稀……なら／に／だ／な／(の)／だ」と形容動詞に活用して、極めて少ない、めったに生じない事態を形容する。「たまに」と違って、その一回だけと意識する現象にも使える。“皆無ではないがほとんど生じない」という例外意識である。」とし、「生起の時間的頻度を問題としているのではなくて、事例の存在の少なさを問題としているのである。」ともしている。

次に飛田・浅田(1994)をみる。

「たまに」について、「頻度が非常に少ない様子を表す」こと、「話者が主観的に頻度が非常に少

ないと感じている対象について、貴重に思っている価値の暗示がある」ことを説明している。

「ときたま」について、「ややくだけた表現で、日常会話中心に用いられる。頻度が非常に少なく、めったに同じようなことが起こらない様子を、気軽さの暗示を伴って表す。」としている。

「ときどき」について、「頻度が少ない様子を表す。プラスマイナスのイメージはない。述語にかかる修飾語として用いられる。」とし、また「頻度は「ときおり」「ときたま」「たまに」よりも高く、「しばしば」「たびたび」「しょっちゅう」「しろくじちゅう」よりも低い。」ともしている。

「まれに」について、「たま」との比較で、「同類のものが非常に少ないことをやや客観的に表し、頻度だけでなく具体物についても用いられる。また、頻度について用いられた場合には、「たま」よりもさらに頻度が低くなり、繰り返し起こる可能性は考えられていない。」と説明している。

八尾(2009)は、「時間的限定性」と「話し手による事態のとらえ方」といった二つの観点から、「たまに・まれに」と「しばしば・たびたび」に共通性があることを考察してきた。その中で、「たまに」について「事態が実現して話し手が事実として確認したか否かには関わらず、＜反復的運動＞の多寡そのものを表すことにその中心的な働きがある。」とし、「まれに」について「実現した事態を話し手が確認し一般化して、一般的なケースの多寡を述べるところに特徴がある」としている。

このように見ると、先行研究の多くは4語の意味・用法を中心に説明するものであると言える。本稿では、4語における意味的な差異ではなく、構文的な特徴を中心にして考察する。具体的に言えば、時間的限定性、述語の語形、人称、否定文との共起、実現した事態であるかどうか、陳述性があるかどうかといった観点から、個々の語が持っている事態の捉え方を見る。

3. 時間的限定性という観点から

時間的限定性の有無という観点からみると、次のような特徴がある。

まず、時間的限定性がない場合をみる。

(4) 日本人はシャイだから、このような会議で発言したがっている人は|*たまに／*ときたま／*ときどき／○まれにだ。(作例)

(5) 日本人はシャイだが、このような会議で発言したがっている人も|○たまに／○ときたま／○ときどき／○まれににいる。(作例)

(4) (5) はともに「日本人」という一般主体の性格・特性を表す文である。(4) は、「日本人は照れ屋だから、このような会議で発言したいと思う人はごく少ない」という意味を表し、話し手の過去の経験から一般論を述べる文である。(5) は、「日本人は照れ屋だが、このような会議で発言したいと思う人が少ないけれどいる」という意味を表し、話し手が過去に経験した事実を述べる文である。(4) のように一般主体で一般論を述べる場合は、「たまに」「ときたま」「ときどき」を用いることはできないが、「まれに」を用いることはできる。それに対して、(5) のように一般主体で事実を述べる場合は4語のいずれも用いることができる。また、

(6) 彼女は○たまに／○ときたま／○ときどき／*まれに無口だ。(作例)

(7) 彼女は○たまに／○ときたま／○ときどき／△まれに|無口になることがある。(作例)

(6) (7) はともに「彼女」という個別主体の性格・特性を表す文である。(6) の「彼女は無口だ」というと、「彼女」の性格・特性を表す。「たまに」「ときたま」「ときどき」と共起すると、「彼女はお喋りだが、時折口数が少ない」という意味を表し、「彼女」の性格・特性ではなく、一時的な状態を示す。この場合は、「まれに」と共起しにくい。もし、(7) のように「彼女は無口になることがある」というと、彼女の特性ではなく、その事実があることを示す。この場合は、「まれに」と共起すると、許容度は(6) より上がる。このようにみると、個別主体の場合、「たまに」「ときたま」「ときどき」を用いると、時間的限定性を持つようになるが、「まれに」の場合は、「まれに～ことがある」という形で表し、その事態を事実として確認できると、許容度が上がる。

次に時間的限定性がある場合をみる。

(8) 彼は○たまに／○ときたま／○ときどき／△まれに|研究室にいる。(作例)

(9) 市川はときどき|○ときたま／○たまに／○まれに|畜生めということばを吐いた。宮村に対していっているつもりだった。(孤高)

(8) は個別主体の「彼」の一時的な状態を表す例である。この場合は、ほかの3語より「まれに」とは共起しにくいと思われる。それに対して、(9) は個別主体で事実を述べる文であり、4語のいずれも用いることができる。

このようにみると、一般主体で一般論を述べる場合は「まれに」しか使わないこと、個別主体で一時的な状態を述べる場合は「まれに」と共起しにくい、事実として確認できる場合は「まれに」を用いることができると言える。また、一般主体にせよ、個別主体にせよ、事実を述べる場合は「たまに」「ときたま」「ときどき」を用いることができる、ということも言える。

4. 述語の語形について

どのような述語の語形が文末に来るかをみると、(10) の「る」形、(11) の「た」形、(12) の「ている」、(13) の「ていた」形がくることができると見られる。次の(10)～(13)は「たまに」を代表例として取り上げたものである。

- (10) 悪いけど東京ってそんな人ばかりでたまに嫌になる。(ガム)
- (11) あちこちに団地のそびえ立つ、どこか砂漠のような広大な丘陵地を横切る舗装道路には、商店などはほとんどなく、車だけがスピードをあげて行き交っている。たまにすいた。バスが、これは妙にのろのろと通過していく。(扉)
- (12) サバトはたまにここで働いている。
 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/E6%92%B2%E6%AE%BA%E5%A4%A9%E4%BD%BF%E3%83%89%E3%82%AF%E3%83%AD%E3%81%A1%E3%82%83%E3%82%93>)
- (13) バスケ、野球、サッカーをたまにやっていた。高校時代は毎日練習、盆も正月もなしでした。(http://members.jcom.home.ne.jp/kiz/aki4-34.htm)
- (10) の「なる」と(11) の「すいた」は完成相で表すものであるが、(12) の「働いている」と(13)

の「やっていた」は継続相で表すものである。それぞれの使用頻度をみると、次の<表1>のようになる¹。

<表1>

	完成相		継続相		実例数
	る形	た形	ている形	ていた形	
たまに	183例 (全体の78.20%)	38例 (全体の16.24%)	12例 (全体の5.13%)	1例 (全体の0.43%)	234例
ときたま	122例 (全体の66.67%)	42例 (全体の22.95%)	16例 (全体の8.74%)	3例 (全体の1.64%)	183例
ときどき	118例 (全体の63.44%)	20例 (全体の10.75%)	40例 (全体の21.51%)	8例 (全体の4.30%)	186例
まれに	134例 (全体の83.23%)	19例 (全体の11.80%)	6例 (全体の3.73%)	2例 (全体の1.24%)	161例

<表1>から、4語の文末に来る述語の多くは、完成相であることが言える。このことから、4語には、「る」形と「た」形で丸ごとの事態の繰り返しを表す傾向があると言える。また、継続相で表す場合は、次の(14)～(17)のように、完成相に置き換えても意味は変わらないものもある。

- (14) 普段は着物姿が多く、たまに番傘を差している。|○差す。 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/E3%81%95%E3%82%88%E3%81%AA%E3%82%89%E7%B5%B6%E6%9C%9B%E5%85%88%E7%94%9F%E3%81%AE%E7%99%BB%E5%A0%B4%E4%BA%BA%E7%89%A9>)
- (15) あと、リアルブラッドってユニットが、ときたまテーマソングを歌ってます。|○歌いますね。 (<http://komachi.yomiuri.co.jp/t/2004/0820/012344.htm?o=0&p=3>)
- (16) 御油宿と赤坂宿の間には御油の松並木があり、ときどき観光客が歩いている。|○歩く。 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/E6%84%9B%E7%9F%A5%E7%9C%8C%E9%81%93374%E5%8F%B7%E9%95%B7%E6%B2%A2%E5%9B%BD%E5%BA%9C%E7%B7%9A>)
- (17) 一般的には哺乳類による事件を取り上げているが、まれに爬虫類や魚類も取り上げている。|○取り上げる。 (<http://ja.wikipedia.org/wiki/E3%83%8F%E3%83%B3%E3%82%BF%E3%83%BC%E3%83%BB%E3%83%8F%E3%83%B3%E3%83%86%E3%83%83%E3%83%89>)

(14) の「差している」を「差す」に、(15) の「歌ってます」を「歌います」に、(16) の「歩いている」を「歩く」に、(17) の「取り上げている」を「取り上げる」に置き換えても意味的に変わらないと思われる。それぞれの「ている」は、4語と組み合わせると、「くりかえし」の意味と重なる。それ故、「ている」形と「る」形のどちらを用いても意味的に変わらない。このようにみると、頻度副詞を用いる文の場合、すでに知られている通り、「る」形と「ている」形といったアスペクトの対立が希薄になると言える。

以上のように、述語の語形を完成相と継続相のどちらで表すかをみると、4語のいずれも完成相で表すことが多く、また4語の表す頻度性で「る」形と「ている」形といったアスペクト的対立が希薄になる、ということが言える。

5. 人称について

人称といった観点から4語をみると、次の<表2>で示されているように、一人称の場合には「まれに」はほかの3語より用いにくい、という特徴がある。また、「たまに」「ときたま」「まれに」の場合には、三人称が主語である文が多く、「ときどき」の場合には、一人称と三人称の例にさほどの差はないということも見られる。

<表2>

	一人称	二人称	三人称	実例数
たまに	54例 (全体の23.08%)	0例 (全体の0%)	180例 (全体の76.92%)	234例
ときたま	34例 (全体の18.58%)	0例 (全体の0%)	149例 (全体の81.42%)	183例
ときどき	79例 (全体の42.47%)	0例 (全体の0%)	107例 (全体の57.53%)	186例
まれに	0例 (全体の0%)	0例 (全体の0%)	161例 (全体の100%)	161例

また、あまり使われていない一人称の「まれに」の場合は、次のように作例してみると、言えなくもないが、ほかの3語より許容度が落ちると思われる。

(18) 私は|○たまに／○ときたま／○ときどき／△まれに|朝まで仕事をする。(作例)

ただし、会話の場では、「～ことがまれにある」は使われている。自分のことを客観的に見るような言い方なら、許容度が上がる。(18)についても、「私は|たまに／ときたま／ときどき／まれに|朝まで仕事をすることがある」にすると、許容度が上がる。

次は、主体が二人称の場合である。二人称で表す実例はないが、次の(19)のように作例することができる。

(19) あなたは、|○たまに／○ときたま／○ときどき／△まれに|自分にご褒美を買うの？(作例)

(19) から、4語とも用いることができるが、「まれに」ではほかの3語より許容度が低いのは、人称の問題ではなく、自分にご褒美を買うことは珍しいと評価することが聞き手に失礼であるためである。

次に主体が三人称である場合をみる。

(20) 彼は、|○たまに／○ときたま／○ときどき／○まれに|山でキャンプする。(作例)

三人称の場合は、4語のいずれも用いることができる。

このようにみると、一人称の場合は「まれに」を用いることはできないとまでは言えないが、ごく少ないこと、あるとすれば「私は～ことがまれにある」という形で用いやすいことで他の3語と異なっていると言える。また、二人称の場合は、「まれに」の持っている語義、つまり数少なく珍しいさまを表す意味の影響であまり使われていない、という点で他の3語と異なっている、ということも言える。

6. 否定文との共起について

4語を用いる文は、否定文と呼応できるかどうかを見ると、次の<表3>になる。

<表3>

	肯定文	否定文	実例数
たまに	234例 (全体の100%)	0例 (全体の0%)	234例
ときたま	182例 (全体の99.45%)	1例 (全体の0.55%)	183例
ときどき	186例 (全体の100%)	0例 (全体の0%)	186例
まれに	161例 (全体の100%)	0例 (全体の0%)	161例

<表3>をみると、「ときたま」を用いた否定文は次の例しかなかった。

- (21) 教科書をひらけるのは僅かの時間であったが、行助はときたま集会に出なかった。(冬の旅)
- (22) {○たまに／○ときたま／○ときどき／*まれに}朝食を食べない。² (作例)
- (21)の「集会に出なかった」ことは、「集会に出ないことがあった」のように表現したほうが許容度が高い。同じことは、(22)の例も説明できる。(22)では、「朝食を食べない」より、「朝食を食べないことがある」の方が一般的に用いられる。否定形で表す場合は、「～否定形+ことがある」で用いるのが許容度が高いと思われる。

このようにみると、4語はともに肯定形で事態の繰り返しを表す傾向があると言える。

7. 実現した事態であるかどうか、という観点から

実現した事態であるかどうかについて、八尾(2009)は「たまに」「まれに」をとりあげて述べたものである³。以下は、「ときたま」「ときどき」も入れて、それらによって表される事態が実現したかどうかを考察する。(23)～(25)は「たまに」の例を例えにして取りあげられるものである。

- (23) なにしろ彼は基一郎にひきとられたときから、なんの因果か化物じみている自分の身長を隠そうとして、人前では滅多に立とうとはしなかったほどなのだから。彼はそれでもたまに{○まれに／○ときたま／○ときどき}松原の榆家を訪れた。(榆家)
- (24) すんなりとして、甲も低い。指先には細くてうすい爪が生え揃っている。それはたとえば、いつも軽い靴をはいて、めったに歩かず、たまに{○まれに／○ときたま／○ときどき}柔らかな絨毯の床を踏んでいた足のように見えた。(扉)
- (23)の「松原の榆家を訪れた」と(24)の「柔らかな絨毯の床を踏んでいた足のように見えた」は実現された事態である。この場合は、4語のいずれも用いることができる。それに対して、
- (25) 「スシ？」
「ええ、オスシなんですけど」
「たまに{○ときたま／○ときどき／*まれに}食べますよ」
「シンコって知ってますか？」(料理)

(26) {○たまに／○ときたま／○ときどき／*まれに}実家に帰ってきてほしいと父に言われた。(作例)

(25) の「食べます」と (26) の「実家に帰ってきてほしい」は実現した事態ではない。この場合は、「たまに」「ときたま」「ときどき」を用いることはできるが、「まれに」を用いることはできないと思われる。ただ、次の (27) のように、事態の実現が未来においてもその実現がすでに発話時点で話し手が認識している場合は、4 語のいずれも用いることはできない。

(27) {*たまに／*ときたま／*ときどき／*まれに}子供に厳しくするな。(作例)

(27) の「するな」は、子供に厳しくしている聞き手に、そのようなことはしないように、と命令するものであり、話し手がその事態を実現しているものとして捉えて、それを防止しようとしているのである。この場合は、実現している事態を表すが、4 語とも用いることはできない。それは、6 の「否定文との共起について」で述べられているように、4 語は否定形で表しにくいからである。

このようにみると、実現した事態しか表わさないことは、「まれに」にとっては重要な特徴であると言える。それに対して、「たまに」「ときたま」「ときどき」は、(25) (26) のように実現されていない事態でも、(23) (24) のように実現した事態でも用いることができる。

以上のことから、「まれに」を用いる文は実現した事態でなければならないが、それに加えて、「たまに」「ときたま」「ときどき」は実現していない事態でも用いることができると言える。

8. 陳述性があるかどうかといった観点

4 語に陳述性があるかどうかをみると、まず述語として文末にくることができるかどうかを考察する。

(28) 高校を卒業して、すぐにトップチームの戦力になれる選手は稀{*たま／*ときたま／*ときどき}だ。(http://footballweekly.jp/archives/1702947.html)

(29) 日本でスリに遭うのは{*たま／*ときたま／*ときどき／○まれ}だ。(作例)

(28) は、「選手はまれに高校を卒業して、すぐにトップチームの戦力になれる」に、(29) は「日本でまれにスリに遭う」に換えられる文である。(28) (29) から、「まれ」は述語になることはできるのに対して、「たま」「ときたま」「ときどき」は述語になることはできない、ということが明らかになった⁴。このようにみると、「まれに」には陳述性があると言える。

また、4 語を用いると、次の (30) (前掲の (25)) のように事態の内にある場合と、(31) のように事態の外にある場合がある。

(30) 「スシ？」

「ええ、オスシなんですけど」

「たまに食べますよ」

「シンコって知ってますか？」(料理)

(31) ルミナだけでなくたいていの中学生と同じように、ほくもたまに眠れなくなることがある。(4teen)

(30)の「たまに」は「食べます」ことを修飾して、「食べる」ことの内にあるが、(31)の「たまに」は「眠れなくなる」ことの外にある。4語を用いると、事態の内と外のどちらにあるかは、実例数を分析してみると、次の<表4>になる。

<表4>

	事態の内	事態の外	実例数
たまに	181例 (全体の77.35%)	53例 (全体の22.65%)	234例
ときたま	134例 (全体の73.22%)	49例 (全体の26.78%)	183例
ときどき	165例 (全体の88.71%)	21例 (全体の11.29%)	186例
まれに	75例 (全体の46.58%)	86例 (全体の53.42%)	161例

<表4>より、「たまに」「ときたま」「ときどき」は事態の内にある場合を表す例が多く、「まれに」では事態の外にある場合と事態の内にある場合の例はそれほどの差はないが、事態の外にある場合の百分率は、「まれに」では他の3語より高いと見られる。「まれに」は、事態の外にある場合に多く用いられることから、ほかの3語より陳述性があると言える。

以上のことから、「まれに」は「たまに」「ときたま」「ときどき」より陳述性があると言える。

9. 連体修飾の場合

「まれに」には次のような固定用法がある。

(32) この教父は日本にいること二十数年、地区長という最高の重職にあり、司祭と信徒を統率してきた長老である。稀に|*たまに|/*ときたま|/*ときどき|みる神学的才能に恵まれ、迫害下にも上方地方に潜伏しながら宣教を続けてきた教父の手紙には、いつも不屈の信念が溢れていた。(沈黙)

(33) 大正七年、第一次世界大戦はドイツの降伏によって終結したが、それまでの造船業界は、稀に|*たまに|/*ときたま|/*ときどき|みる活況に沸いていた。(戦艦)

(32)は、「この教父は日本に二十数年在住しており、地区長という最高の重職にあり、司祭と信徒を統率してきた長老である。めったにない神学的才能に恵まれ、迫害下にも上方地方に潜伏しながら宣教を続けてきた。教父の手紙にはいつも不屈の信念がいっぱいだった。」という意味を表す。(33)は「大正七年、第一次世界大戦はドイツの降伏によって終結したが、それまでの造船業界は、めったにない活気のある様子に沸いている。」という意味を表す。(32)(33)の「まれに」は「まれにみる+名詞」という形で、「めったに見られない。数少なくめずらしい」という意味を表し、修飾される名詞のめずらしさを表す。この場合の「まれにみる」は実現した事態を事実として確認し、しかも一般化されて、熟語となり、ほかの3語とは置き換えられない。このことは八尾(2009)でも述べられている。

10. まとめ

これまでの考察から、4語のいずれも完成相で表すことが多く、また4語の表す頻度性で「る」形と「ている」形といったアスペクト的対立が希薄になるという点、肯定形で事態の繰り返しを表す傾向がある点で共通している。

それに対して、一般主体で一般論を述べる場合は「まれに」しか使わないこと、個別主体で一時的な状態を述べる場合は「まれに」と共起しにくいことが、事実として確認できる場合は「まれに」を用いることができること、一般主体にせよ、個別主体にせよ、事実を述べる場合は「たまに」「ときたま」「ときどき」が用いられることが言える。また、「まれに」は実現した事態を表さなければならないこと、一人称と二人称にあまり用いられないこと、ほかの3語より陳述性があること、「まれにみる+名詞」といった固定用法があることなどで他の3語と異なっている。

このようにみると、「まれに」は他の3語に比べて、構文的には大いに異なっていると言える。また、低頻度を表す副詞の中で、「たまに」「ときたま」「ときどき」のように、単に事態の頻度性を表すものもあれば、それに加えて「まれに」のように陳述的に用いられるものもあるということも言える。

注

- ¹ 4語の実例数の多くは地の文である。
- ² 「{|*たまに/*ときたま/*ときどき/*まれに|スリランカ料理を食べない。}」のような否定文の場合は、スリランカ料理は日頃食べないのが一般的なので非文となる。このように言わない場合は、補語の語義などからの影響があると言える。
- ³ 八尾(2009)は、「たまに」について「事態が実現して話し手が事実として確認したか否かには関わらず、<反復的運動>の多寡そのものを表すことにその中心的な働きがある。」とし、「まれに」について「実現した事態を話し手が確認し一般化して、一般的なケースの多寡を述べるところに特徴がある」としている。
- ⁴ 「彼が学校にくるのは{|*たま/*ときたま/△ときどき/○まれ|だ。}」という文では、「ときどき」を用いることはできないとまでは言えないが、「まれ」より許容度が低いと思われる。また、162冊の戦後の小説を中心にして集めた実例では、「まれだ」は6例あるが、「ときどきだ」は1例もない。このことから、「ときどきだ」は言えるとしても、「まれだ」に比べて、述語用法の比率はかなり少ないと言える。

参考文献

- 久米稔(1968)「頻度をあらわす副詞の意味の測定」、『早稲田大学語学教育研究所紀要』7、早稲田大学語学教育研究所。
- 工藤真由美(1995)『アスペクト・テンス体系とテキスト—現代日本語の時間の表現』、ひつじ書房。
- (2002)「現象と本質—方言の文法と標準語の文法」、『日本語文法』2巻2号、日本語文法学会。
- 小池清治・小林賢二・細川英雄・山口佳也 編(2002)『日本語表現・文型事典』、朝倉書店。
- 国立国語研究所(1991)『日本語教育指導参考書19副詞の意味と用法』、大蔵省印刷局。
- 小学館国語辞典編集部(2002)『日本国語大辞典(第二版)』、小学館。
- 仁田義雄(1991)『日本語のモダリティと人称』、ひつじ書房。

- (2002)『副詞的表現の諸相』、くろしお出版。
飛田良文・浅田秀子 (1994)『現代副詞用法辞典』、東京堂出版。
森田良行 (1989)『基礎日本語辞典』、角川書店。
八尾由子 (2009)「日本語の副詞シバシバ・タビタビとタマニ・マレニ」、『文化共生学研究』8、岡山大学
社会文化科学研究科。
矢澤真人 (1986)「反復の連用修飾成分——「動詞句の素性と反復表現の構文論的考察」試論——」、『学習
院女子短期大学国語国文論集』第15号、学習院女子短期大学。
———— (1987)「頻度と連続——連用修飾成分の被修飾単位について——」、『学習院女子短期大学紀要』
25、学習院女子短期大学。
———— (2000)「副詞的修飾の諸相」、仁田義雄・村木信次郎・柴谷方良・矢澤真人『日本語の文法1 文
の骨格』、岩波書店。

使用テキスト

ガム = 山田詠美『チューイングガム』(角川文庫)角川書店 (1994)、肝 = 平岩弓枝『肝っ玉かあさん』(文
春文庫)文藝春秋 (1978)、孤高 = 新田次郎『孤高の人』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社 (1995)、
戦艦 = 吉村昭『戦艦武蔵』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社 (1995)、沈黙 = 遠藤周作『沈黙』(CD-RO
版新潮文庫の100冊)新潮社 (1995)、扉 = 夏樹静子『風の扉』(角川文庫)角川書店 (1993)、楡家 = 北杜夫『楡
家の人々』(CD-ROM版新潮文庫の100冊)新潮社 (1995)、冬の旅 = 立原正秋『冬の旅』(CD-ROM版新潮
文庫の100冊)新潮社 (1995)、4teen = 石田衣良『4TEEN』(新潮文庫)新潮社 (2005)、料理 = 村上龍『村
上龍料理小説集』(集英社文庫)集英社 (1991)、私の犬 = 佐藤正午『私の犬まで愛してほしい』(集英社文
庫)集英社 (1989)。

(本文中で「作例」と注記した例はネイティブによるものであり、アドレスが書かれたものはインターネッ
トで調べたホームページ上の文例である。)

<付記> 本稿は98年度台湾国家科学委員会研究計画の成果の一部である。

(江雯薰 台湾・淡江大学日本語文学科 准教授)